

学位論文審査結果の要旨

所 属	乙 三重大学医学部（皮膚科学）	氏 名	波 部 幸 司
審 査 委 員	主 査 丸 山 一 男 副 査 駒 田 美 弘 副 査 島 岡 要		
(学位論文審査結果の要旨)			
Presence of antiphospholipid antibody is a risk factor in thrombotic events in patients with antiphospholipid syndrome or relevant diseases			
【主論文審査結果の要旨】			
著者らは論文において下記の内容を述べている。			
抗リン脂質抗体 Antiphospholipid antibodies (aPL) には lupus anticoagulant (LA), anticardiolipin antibodies (aCL) IgG と aCL-β2-glycoprotein I (β2GPI) complex IG があり、それぞれ血栓性イベント(thrombotic event: THE)のリスク因子となっており、血栓症又は血栓性の分娩異常を伴うものは抗リン脂質抗体症候群(APS)と呼ばれるが、aPL と血栓性イベントに関するエビデンスは多くない。			
三重大学医学部附属病院を受診した抗リン脂質抗体症候群が疑われた患者 458 例（血小板数減少(12 万/μ l 以下)群 124 例、活性化部分トロンボプラスチン時間(APTT)延長群 126 例、自己免疫疾患群 146 例、前記の以外の血栓症群 134 例)を対象に aPLs と THE を後ろ向きに検索した。			
THE は 458 例中の 232 例に認められ、うち 148 例が静脈血栓、59 例が動脈血栓、18 例が微小血栓、20 例が妊娠時障害であった。THE は aPL の存在、特に LA の存在と有意に相関した。自己免疫疾患群では、どのタイプの aPLs でも存在すれば、THE の頻度が有意に上昇した。さらに、複数の aPLs が存在すると 1 種類の場合に比べ、THE の頻度は有意に増加した。群間比較では、APTT の延長群では THE の頻度が有意に増加した。一方、血小板減少群と自己免疫疾患群では THE のリスクは増加しなかった。 aPL の存在は THE 発症の高リスクを示す指標となるが、背景にある疾患によってそのリスクの高さも変化した。			

以上のように aPL 陽性は THE 発症のリスクであり、複数の aPL 陽性はさらに THE 発症リスクを増加させ、とりわけ LA が最も THE 発症リスクに関連を示した。

本論文は APS およびその関連疾患における血栓性イベントと aPL の関連について、十分な症例数で解析した論文であり、学術上極めて有益であり、学位論文として価値あるものとして認めた。

Int J Hematol. 2013 Mar;97(3):345-50

doi: 10.1007/s12185-013-1277-0. Epub 2013 Feb 3

著者名

Habe K, Wada H, Matsumoto T, Ohishi K, Ikejiri M, Matsubara K,
Morioka T, Kamimoto Y, Ikeda T, Katayama N, Nobori T, Mizutani H